

# Action

---

女性の再チャレンジ支援プログラム  
「わたしのキャリア発見塾」  
成果と課題を検証する

伊藤静香

特定非営利活動法人参画プラネット常任理事  
名古屋市男女平等参画推進センター指定管理者「管理運営室」情報局担当  
アサーティブ・サポーター  
ウェブサイト・プランナー  
名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士前期過程に在籍

# 女性の再チャレンジ支援プログラム「わたしのキャリア発見塾」

## —成果と課題を検証する

伊藤静香

### はじめに

「女性のチャレンジ支援」として、各地域の女性・男女共同参画センター<sup>1</sup>では「キャリアアップセミナー」や「再就職講座」が盛んに開催されている。とくに、再就職を希望する結婚・出産で一旦離職した女性への「再チャレンジ支援」は、社会に埋もれがちな価値ある「人的資源」を活かすためにも重要である。再チャレンジしたいと願う女性はどのような支援を求め、再チャレンジを果たすためにはどのような支援が実効的なのであろうか。

NPO法人参画プラネット（以下、参画プラネット）が提供した女性の再チャレンジ支援プログラム「わたしのキャリア発見塾（以下、「キャリア発見塾」）」は、単なる情報提供や知識・技術等の取得にとどまらず、インターンシップの導入、女性の意識変革を促すセミナー等の開催による支援を行ってきた。本稿では、このプログラムによる受講生のエンパワメントの過程を明らかにし、再チャレンジ女性への支援事業の成果と課題を検証する。

### 1 プログラムのねらい

2007年度版の内閣府男女共同参画白書によると、男女の雇用機会均等や仕事と子育ての両立支援のための取組が行われてきたものの、出産を機に多くの女性が離職しており、出産前後を超えて就業を継続している者の割合は増えていない。女性の労働力率の特徴とされるいわゆるM字カーブについても、30代の子育て期にあたるM字の底が近年上がってきているが、それは晩婚化によって未婚有業者が増えていることによるもので、結婚・出産した女性が継続就業あるいは再就業できる環境が整ってきたことによるものとはいえない<sup>2</sup>。

このような状況の中「女性の「再チャレンジ支援」では、キャリア開発にとどまらず、女性が実践の中で能力を身につけ、自己肯定感を持ちながら、再チャレンジを果たせることが重要」であり、「そのためには、「女性が再チャレンジできる場」とエンパワメントできる「プログラム」そして「プログラムの担い手」が必要である<sup>3</sup>と筆者は提案した。

参画プラネットで中枢を担う女性たちが、実践の中で能力を身につけながらキャリアアップしていった過程は、女性のキャリアアップの一つの実験モデルとして有効であった。メンバー自らが実験モデルとなった事例を経て、現在参画プラネットでは、社会への還元を目標に、市民に向けた新たな女性の再チャレンジ支援プログラムとして「キャリア発見塾」を企画、実施した。

## 2 「わたしのキャリア発見塾」

「キャリア発見塾」は、再チャレンジしたいと願う女性が第一歩を踏み出すための支援事業として参画プラネットが2008年1月23日から8回の連続講座で開催したパイロットプログラムである。

プログラムの成り立ちは、「インターンシップを導入した再チャレンジ支援プログラムー「わたしのキャリア発見塾」開講までのプロセスをたどる」<sup>4</sup>を参照されたい。

今回実施した「キャリア発見塾」は、毎週1回8週間の連続講座となっている。そのうち4回がワークショップを活用したセミナー、4回が実際に働く経験をするインターンシップとなっている。セミナーでは、男女共同参画に関する学習、アサーティブ、女性と労働を考える学習などが提供された。くわしい内容は、ちらし（資料1、P44）を参照されたい。

このプログラムの特徴は、再チャレンジを目指す女性を対象にインターンシップを導入し実際に働く「経験の場」を提供したことと、すでに再チャレンジを果たした先輩たちがロールモデルとなり、自らの経験から有効的なプログラムを提供することで、プログラムの担い手となったことである。

また、結婚・出産などでしばらく働くことから遠ざかり、活動の場が家庭に偏りがちな再チャレンジ女性にとって、働くことと家事・育児などの家庭生活とのバランスのとり方は、両立を実現するための課題であると考えられる。「キャリア発見塾」ではインターンシップで自分なりのバランスのとり方を試験的に行い、受講生にその後の「仕事と家庭の調和（ワーク・ライフ・バランス）」のある生き方を考えるきっかけを提供した。

## 3 プログラムの中で参加者に実施した質問の結果

「キャリア発見塾」の受講生には、プログラムの中で「自分が何を目標とし、何をしたいのか」についてじっくりと考えてもらうため、またその成果を自ら評価するために、初回の「目標設定」と最終回の「振り返り」のシートへの記入および、初回と最終回のそれぞれに「再チャレンジに対する期待と不安」がどの程度あるのかについてアンケートを行った。

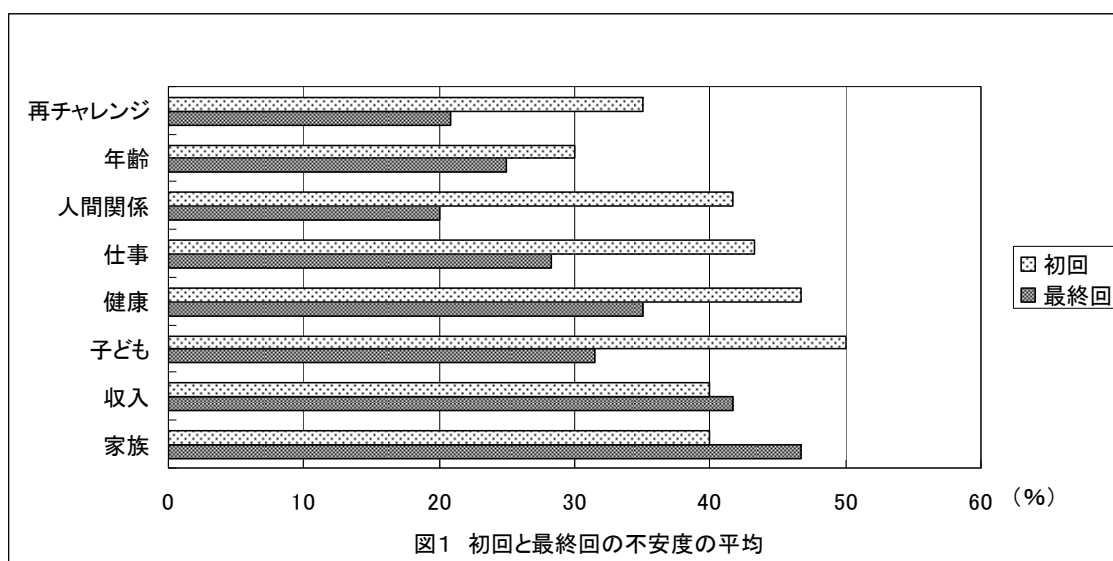
アンケート対象者は6名であり、「目標設定」「振り返り」「アンケート」とも記述式で回収率は100%であった。

初回に実施した「目標設定」の中で質問した参加動機（複数回答可）は、「社会とつながりたいと思ったから」という回答が、6人中5人であった。次に多かったのは、「働ける自信を持ちたかったから」が6人中3人、「参画プラネットのセミナーに参加したかったから」が6人中3人いた。「子どもを預け何かをしたかったから」「実際に働いてみる機会（インターンシップ）があったから」という回答は、6人中2人であった。キャリアを身につけたかったからという回答は6人中1人で、「働きたいけれど、何をしたいのかわからなか

ったから」は、皆無であった。そのほかには、「NPOの活動について知りたかったから」「自分を見つめるきっかけになればいいと思った」「女性学に興味がある」「男女共同参画に興味があったから」という回答もあった。「(講座が終了する) 2ヵ月後にはどんな「わたし」になっていたいですか」という問いには、「生活のリズムができています」「自信を持って行動できています」「自分の将来に可能性が増えている」「目標が明確になってスッキリしている」などがあつた。また、「そうなるために障害となっているものは何ですか」という問いには、「精神的強さがない」「目標となる方向がわからない」「知識や情報のなさ」「人間関係が広がらないこと」「家族の反対」などが挙げられた。

アンケートは、再チャレンジに対する期待と不安をあわせて100%とし、再チャレンジするにあたって、「再チャレンジ」そのもの、「年齢」、「人間関係」、「仕事」、「健康」、「子ども」、「収入」、「家庭」のそれぞれの項目について自由にパーセンテージにして、初回と最終回に書いてもらった。

各受講生に記入してもらった不安のパーセンテージの平均を算出し、初回と最終回の変化を見た。「再チャレンジ」に対する不安の平均値は、初回35.0%、最終回20.8%に減った。年齢に対する不安度は初回30.0%、最終回25.0%であり、「人間関係」では、初回41.7%、最終回20%であった。仕事に対する不安度は43.3%から28.3%、健康に対する不安度は46.7%から35.0%に減った。子どもに対する不安度も50.0%から31.5%に減っている。収入に対する不安度は初回40.0%、最終回41.7%で、家族に対する不安度は初回40.0%、最終回は46.7%であった。(図1)



最終回に実施した「振り返り」では、自分自身について振り返ってもらった。「この講座であなたが得たものはなんですか（複数回答可）」という問いには、「情報」、「自信」、「きっかけ」がそれぞれ6人中5人であった。「知識」は6人中3人であった。その他として、「自分はもうだめという最悪な精神状態から脱出できた」、「対人面で安心感が得られた」、「自分の心の中の叫びに気づいた」などがあった。

## 4 考察

### (1) 「わたしのキャリア発見塾」の受講生

「キャリア発見塾」の受講生6名のうち4名は、未就学児を持つ子育て中の女性であった。受講動機に「社会とつながりたいと思ったから」という回答が6人中5人と多かったことから、育児中の女性がいかに社会との接点が少なく、それを求めているかがうかがわれる。一旦離職した女性が、社会とつながる方法として「働く」ことを考えたとき、再就職が容易ではないことは「女性の再チャレンジ支援策」が重要な施策と位置づけられていることから明らかである。「高学歴化し、退職後も就労希望はあるにも関わらず女性の再就職が進まない背景には、女性側の要因もある。無職の期間における自己評価の低下である」<sup>5</sup>といわれるように、結婚・出産でキャリアを中断された女性にとって、家庭という閉ざされた空間で過ごす期間が長ければ長いほど自信を喪失しやすく、再就職への不安は大きくなる。「働く自信を持ちたかったから」という受講動機の回答が半数あることは、受講生が再び働くことに自信を持てずにいることがうかがえる。「実際に働いてみる機会（インターンシップ）があるから」と答えたものが6人中2人いた。試験的に働く機会を経験してみて、できそうだと安心感を得て働き始めたいと考えている受講生がいたことがわかる。

「キャリア発見塾」では、情報提供、技術・知識の取得支援にとどまらず、「自分は働ける」という安心感を持って一歩を踏み出せる実践的な支援が有効的であると考えインターンシップを導入した。「実際に働く経験をして『できそう』だと自信が持てる」実践の「場」を提供したのである。受講生の動機からもこのプログラムのねらいが、再チャレンジを目指す女性が支援として求めているものと近いことがわかる。

また、今回の受講生の中には、参画プラネットが指定管理者をしている名古屋市男女平等参画推進センター（以下、センター）主催の講座やイベントに参加経験を持つ者もいた。

「参画プラネットのセミナーに参加したかったから」という回答は、キャリア発見塾の講座内容だけでなく、主催者自体に関心を寄せて受講したと言えよう。「センターで働くNPOの女性たちがとても生き活きとしているのを見て、自分もそうなりたと思った」と初回の自己紹介で述べた受講生もいた。この受講生の言葉は、参画プラネットのメンバーが、すでにロールモデルとして存在していることを表している。

## (2) 再チャレンジする女性の不安

再チャレンジする女性たちの不安要因は、何が一番大きいのであろうか。初回のアンケート結果では、各受講生のパーセンテージはそれぞれ違っているが、各項目の平均値をそれぞれ出してみると、子どもに対する不安が 50.0%と一番高い。理由として「仕事についてたとしても子どもの病気に対応できるか不安」「家事がおろそかになって子どもに迷惑をかけないか不安」「(託児で) 子どもが泣くと私も悲しい」などがある。子育て中の立場が再チャレンジへの不安を増していることは、すでに言われているが、ここでも明らかである。しかし、講座の最終回では、子どもに対する不安は、31.5%に減っている。講座期間中の 8 週間、毎週 1 回子どもを託児に預け、決まった時間にセミナー受講や、インターンシップをするうちに、子どもを預けて働くことへの不安が減ったと思われる。また、他の受講生と子育ての悩みを共有し、話をしたり、情報交換できたりすることも不安を取り除く上で有効であったと考える。受講中に「自分と同じ子育て中の女性といろいろ話ができて、よかった」という感想を述べた受講生がいた。

アンケート結果では、ほとんどが初回時の不安に対して最終回の不安度は減っており、キャリア発見塾が、再チャレンジするにあたって不安に思っていることを少しでも軽減できたと推察される。

しかしながら、家族に対する不安、収入に対する不安の 2 点で平均値が増していることに注目したい。この 2 点は、現在の女性の社会参画における大きな課題といえるであろう。

### ① 家族に対する不安

まず、家族に対する不安についてであるが、個々の数値を見てみると 6 人中 5 人の不安は減っているが、一人の受講生 A さんの不安がかなり大きく増している。A さんは講座を受講するうちに自分が抱えている大きな課題に気づいた。「自分が社会に参画したかったのは、社会的に認めてもらいたいというよりも、家族にわたしの存在を認めてもらいたからだとすることに気がつきました。けれど、それがとても難しいことのように思えて不安です」と A さんは講座の最終回、自分の気持ちを率直に語った。女性とくに主婦が社会に進出する場合には家族との関係が大きく左右する。家族における「性別役割分業」がまだまだ存在する今の世の中で、「母親・妻」として女性が役割を期待され、縛られている女性は多い。彼女は、講座を受講するうちに「家族から妻・母として期待されている自分の存在とわたしのために生きてほしいと願う自分の気持ちとの狭間でもがいている自分」に気づいたのである。家族との関係が大きな課題であることに気づいた今後は、彼女がこの課題に向き合い解決に向かうことを期待している。

### ② 収入に対する不安

また、収入についての不安が増しているのは、セミナーの中でとりあげた女性の労働環境の問題についての学習が反映されているのではないと思われる。ここでは男女雇用機

会均等法制定後、女性の働く環境が改善されているというものの厳しい状況にある現状を、社会の問題として認識するような学習を提供した。日本の「従来型の企業の雇用管理システムが社会保障制度などを放置したままで、再就職支援として女性のチャレンジ支援のみを行っても限界がある。こうした制度の問題を理解し、自分たちの置かれた状況を知り、また問題を解決するための方策をみだすような学習が重要である」<sup>6</sup>が、「キャリア発見塾」では、受講生がそのような問題を学習し、自分のおかれた状況をしっかりと認識するよう努めた。

不安をもった再チャレンジ女性は、直面した問題を内面化し、自分に責任があると思いがちである。女性の抱えている問題の多くは、個人としての問題というより、社会の構造から派生している問題であるということに気づく女性は少ない。そのような女性に求められるのは、「わたしの問題は社会の問題である」と気づき、問題を社会化することであり、その上で自分の課題を解決するために本当の「課題」を見つけるチカラである。「キャリア発見塾」では、そのような「課題発見力」をつけるような取組みがなされており、上記の二例から、その取組みによって自分たちの課題を見つけることができた受講生がいたことは、情報提供のみにとどまらず、受講生自らの課題と向き合うプログラムとなっていたことがいえるであろう。

### （３）プログラムのキーワードは、「まず、やってみること」

「キャリア発見塾」の合言葉は、「まず、やってみること」である。参画プラネットのメンバーたち自身が、自らの経験から、たとえ小さくともまず一步を踏み出せば、その一步がやがて大きなステップになると確信しているからである。

今回の講座を担当した中村と筆者は「一步先行く先輩ロールモデル」として受講生の「サポーター」となり、講師・ファシリテーターを務めた。講座を通して「サポーター」は、受講生に「自ら動き出そう」というメッセージを発信し続けた。受講生の一人は、講座期間中に、「できたらいいけど、難しそう」と思い込んで、なかなか実現に至らなかった自主企画イベントを開催することができた。「講座を受講しているうちに、イベントができそうな気持ちになった。実際、開催してみたら、思ったほど難しくなかった」と、講座の中で自分の経験を語った。このような経験は、ほかの受講生へも刺激となったことであろう。講座終了後の「振り返り」の中で、「この後どんな一步を踏みだしますか」という問いに、「楽しいイベント企画を続ける」「少しずつでも実行する時間を持つ」「子どもを預けて働くことにチャレンジする」と前向きな姿勢が見られた。

### （４）受講生のエンパワメント

受講生同士のネットワークも再チャレンジ女性にとっては、大きなサポートになる。初回は不安げな表情だった受講生も、回を重ねるごとに和やかな雰囲気となり、受講生同士の間関係も良好であったことが伺われる。少人数によるワークショップが親密感をもて

る環境を作り出して、お互いの悩みを共有し、励ましあい、前向きな気持ちをより引き出すことにつながったといえる。

「この講座であなたが得たものは何ですか（複数回答可）」という問いに、「情報」と答えた者が6人中5人いた。直接、就労につながる情報の提供や関連する書籍などの紹介はセミナーの中でも行ったが、会場がセンターであったことも受講生には情報が手に入りやすい環境であったといえる。センターには、ジェンダー関連やチャレンジ支援関連の書籍の配架、チャレンジ・インフォメーションコーナーによる情報提供が随時されており、毎週センターに通うことは、それらの情報を手にする機会も増えると推測される。

また、受講生同士の情報交換も忘れてはならない。「再チャレンジしたいと思っている人が集まり、それぞれ望むものはちがうが向かっていく人たちがいるということ」「働き方にもいろいろあるし勉強になりました」という回答があったが、セミナーを通じて、それぞれ違う目的をもった受講生との話し合いから自分自身を振り返るきっかけになったのではないかと考える。

さらに、知識として得たものに第3回で提供した「アサーティブ」という回答があった。自分の気持ちを大切にし、それを表現してもいいという「アサーティブ」の考え方は、受講生が「女性は控えめ、感情を出さないのがよい」とされていた社会規範から、主体的に生きることへ一歩ふみだすきっかけとなったことであろう。

プログラムのねらいが、単なる再就職のための情報提供、知識・技術取得支援だけでなく、女性をエンパワメントするものであることが担い手である「サポーター」にしっかりと認識されており、講座全体を通じて「サポーター」は、受講生の不安を軽減し、自信を回復させ、自分の力を信じることができるよう働きかけをした。

アンケート結果で、6人中5人が「自信」を得たと回答したことからも、このプログラムが有効であったと言える。「インターンを体験したことで少し自信になった」と、はっきりと成果を書いた受講生もいた。また「不安に思う気持ちがあってもいいということが自信につながった」という回答からは、自分の力を信じることができるようになったからこそ不安を受け入れられたのではないかと推察する。むやみに不安を取り除くより、「自分には不安もあるが大丈夫」と不安を持った自分を受容している受講生の安定感を感じる。

しかし、8週間という短い期間の中に、セミナーとインターンシップを行うには課題も生じた。セミナーの間にインターンシップを設定したため、全員が揃うセミナーが途切れてしまい「残念だった」という声も聞かれた。セミナーとインターンシップの日程設定については、次回の講座で改善したい。



## 5 まとめと課題

### (1) 継続する支援プログラムとして

女性の再チャレンジ支援には、働く「場」の提供も必要であると考えますが、実際にはプログラム提供者が働く直接的に「場」を提供するには限界がある。参画プラネットにおいても、受講生全員が就職を希望したとしても、全員を雇用することは困難である。終了後のフォローをいかにしていくかが今後の課題である。受講生が講座終了直後の前向きな姿勢を保ちつつ、チャレンジできるよう支援していく必要があると考える。

「キャリア発見塾」では、数ヵ月後のフォローアンケートの実施、同窓生を中心としたネットコミュニティを企画中である。講座が終了しても、受講生をずっと見守り続ける姿勢でプログラムを継続していく予定である。

現在、受講生の一人は、参画プラネットが主催する指定管理者事業のイベントの際に飾る講師用の花をボランティアで提供している。フラワーアレンジメント講師という専門性を活かし、NPO活動に協力している。また、他の一人は受講中にすでに自分の専門分野に就職が決まったが、講座を受講するうちにNPO活動にも関心を持つようになった。現在は、ウェブデザイナーの専門技術を活かして週1回参画プラネットのウェブ担当のサポートをしている。また、ハローワークを通して求人広告を出した参画プラネットの求人に応募した受講生もいた。「自分がだめだと思う求人でも見ただけであきらめずチャレンジしてみることが大切」という「サポーター」の言葉に励まされて、思い切って応募した受講生もいた。「キャリア発見塾」で背中を押してもらった受講生がそれぞれの一步を踏み出し歩き始めている。

参画プラネットでは、「キャリア発見塾」の受講生は「社会の大切な資源」と考えており、今後も継続的にかかわっていきたいと考えている。

### (2) 「問題を社会化するチカラ」を育む装置としての女性・男女共同参画センター

現在、子育て期にある30代の女性は、男女平等に教育を受け、男女雇用機会均等法以降に就職し、表面的には女性差別の少ない社会で育ってきたといえる。実際、この年代の女性に聞くと、今まで女性だからといって差別を受けていると感じたことがないという人もいる。そのような女性が家事・育児の両立の難しさを感じたときに、その原因を自分の能力不足だと考え、問題の所在を自分の中に向けてしまう可能性がある。

こうした背景には、男女共同参画社会基本法が制定されまもなく10年になるが、「企業を主要な担い手とする日本の生活保障システムでは、1990年代後半以降、中高年の「男性稼ぎ主」が相対的に温存され<sup>7</sup>ており、「男は外で働き、女は家庭」という性別役割分業がいまだ存在していることが考えられる。受講生たちの苦悩が決して個人の問題ではなく、社会の問題であることは明らかである。

「キャリア発見塾」では、学びと実践を通して、受講生と「サポーター」が双方向でコミュニケーションをとりながら、再チャレンジしようとする女性たちに立ちはだかるさまざまな問題を見つける手助けをした。さらにインターシップで実際に働いてみることにより、その問題が具体化し、問題解決の糸口を探ることになった。ここでは「わたしの問題を社会化するチカラ」を育むインキュベータの役割を意識してプログラムが構成され、その目標が最大に活かされるよう講座が進められていった。「生涯学習」で学ぶだけ、あるいは賃金のために「仕事」をするだけでは得られない、「わたしの問題を社会化するチカラ」を育むことができるのが、「キャリア発見塾」である。

女性の再チャレンジ支援では、①「女性が再チャレンジできる場」と②エンパワメントできる「プログラム」そして③「プログラムの担い手」が必要であると筆者は「再チャレンジする女性たちの現状と課題ー男女共同参画センターにおける人的資源活用をめざす実践事例からー」で提案した。参画プラネットが「キャリア発見塾」でインターシップを導入できたのは、センターの指定管理者となり、模擬とはいえ「働く場」の確保ができたからである<sup>8</sup>。

近年、指定管理者制度が各地の女性・男女共同参画センターに広がり、柔軟な運営が期待されており、「キャリア発見塾」のような女性の再チャレンジ支援プログラムを展開することも可能となってくるであろう。「わたしの問題を社会化」し、女性自らの課題を見つけ、解決に至るまでの過程を支援することが、女性をエンパワメントすることにつながる。それは女性・男女共同参画センターの重要な役割でもある。ならば、再チャレンジ女性の「課題解決のチカラ」を育む装置として女性・男女共同参画センターの存在は、今後大きく期待されるべきである。

## おわりに

「キャリア発見塾」は、再チャレンジ当事者である参画プラネットのメンバーが、自らの経験と実践の中から支援に求められる要素は何かを検証し、女性の再チャレンジ支援プログラムとして企画立案をした。「サポーター」となり講座を担当した中村と筆者は、専業主婦から再チャレンジを果たし、5年が経過した。NPO活動を通して、一歩先行く先輩たちの支援をうけながらキャリアを重ね、自信を取り戻し、自らの力を信じて進み続けている。その二人が今回は支援者となり、市民にむけたプログラムにつながった。長期的に継続することを目標にしたこのプログラムに期待されるのは、プログラムの担い手となるロールモデルが成長していくことである。支援される立場だった二人が支援する側に成長した段階から、次の「キャリア発見塾」の受講生が支援者となる可能性の段階へと、さらなる発展が期待されている。

---

1 本稿では、女性センターおよび男女共同参画センターなど、女性の地位向上・男女共同参画社会の推進等を目的として各種の研修・交流・情報提供・相談等の事業を実施している施設のことを女性・男女共同参画センターという。

1 内閣府『内閣府男女共同参画白書』（内閣府 2007）

1 伊藤静香「女性の再チャレンジの現状と課題—男女共同参画センターにおける人的活用の実践事例から—」国立女性教育会館編 『研究ジャーナル』11号（国立女性教育会館 2007）85-94。

1 中村奈津子「インターンシップを導入した女性の再チャレンジ支援プログラム—「わたしのキャリア発見塾」開講までのプロセスをたどる」NPO法人参画プラネット編集局編 『プラネットの軌跡2007』（NPO法人参画プラネット 2008）21-30。

1 国広陽子「女性のキャリア形成支援と女性センターの課題」国立女性教育会館編『女性のキャリア形成支援に関する調査報告書』（国立女性教育会館 2004）38-48。

1 国広陽子「女性のキャリア形成支援と女性センターの課題」国立女性教育会館編『女性のキャリア形成支援に関する調査報告書』（国立女性教育会館 2004）47。

1 大沢真理『現代日本の社会保障システム 座標とゆくえ』（岩波書店 2007）187。

1 参画プラネットは、2006年4月より、名古屋市男女平等参画推進センターの指定管理者に選定された。当法人の指定管理者事業部門の協力を得て、受講生のインターンシップ受け入れが可能となった。

#### ■参考文献

伊藤静香（2007年）「女性の再チャレンジの現状と課題—男女共同参画センターにおける人的資源活用の実践事例から—」『研究ジャーナル』11号 国立女性教育会館

大沢真理（2007年）『現代日本の社会保障システム 座標とゆくえ』岩波書店

国広陽子（2004年）「女性のキャリア形成支援と女性センターの課題」『女性のキャリア形成支援に関する調査報告書』国立女性教育会館

内閣府（2007年）『内閣府男女共同参画白書』内閣府

中村奈津子（2008年）「インターンシップを導入した再チャレンジ支援プログラム—「わたしのキャリア発見塾」開講までのプロセスをたどる」『プラネットの軌跡2007』NPO法人参画プラネット



2

わたしのキャリア発見塾

いままでの仕事の経験をいかして働きたい。
やりたいことはあるけれど、資格や経験がなく自信がない。
自分自身のスキルアップを目指している。
仕事をしたいけれど、すぐに企業で働くことにはちょっと抵抗がある。
子育てしながら、なんとか仕事を始めたい。
働きたいと漠然と思っているけれど、どういうふうアレンジしてよいのか迷っている。

そんなあなたにお会いしたいです。

ワークショップ中心の学び、
インターンシップを活用した実践、
こうすれば!チャレンジできる。
きっと、あなたの一歩につなげます。

- 第1回:1月23日(水): チャレンジ事始/入塾式
第2回:1月30日(水): 事始インターンシップ
第3回:2月 6日(水): セミナー「社会へつながる!~仕事の常識、非常識~」
第4回:2月13日(水): 事始インターンシップ
第5回:2月27日(水): 事始インターンシップ
第6回:3月 5日(水): セミナー「社会で使える!~さわやかな交渉力~」
第7回:3月12日(水): 事始インターンシップ
第8回:3月26日(水): チャレンジ応援/終了式

★個別対応のキャリア・アドバイス「キャリア・ナビゲート」を受けることができます。

と き:2008年1月~3月の毎週水曜日 午後1時から4時
ところ:名古屋市男女平等参画推進センター つながれっとNAGOYAセミナールーム
参加費:5,000円 (全日程分/1時間のキャリア・ナビゲート付き)
託 児:手続きについては、お問合せください。
主 催:特定非営利活動法人 参画プラネット

申込み・問合せ

特定非営利活動法人 参画プラネット チャレンジデスク担当
名古屋市中区千代田5-18-24 名古屋市男女平等参画推進センター つながれっとNAGOYA
TEL. 052-249-7277 FAX. 052-249-7278
Email info@sankakudo.net



公共交通機関でお越しください。◆地下鉄「鶴舞」駅①番出口から徒歩約5分 ◆バス「千代田五丁目」停から徒歩約2分 ◆JR「鶴舞」駅 名大病院口から徒歩約5分